あらすじ

女。一人。ベッドの上。

受話器を手にし、耳にあて、声を出す。

沈黙が訪れ、また声を出す。

その繰り返し。

相手は、男か。別れた恋人か。

彼女は繋がらないことを、切断されることを、

過度に恐れているように見える。

会話を、無理に引き伸ばしているように見える。

彼女と相手を結ぶ線は、

次第に彼女の首に巻きついていき…。

原作／ジャン・コクトー

1889年、パリ郊外のメゾン＝ラフィットに生まれる。詩作から芸術活動を開始し、以後、小説、演劇、絵画、映画などあらゆる分野で才覚を発揮。ジャンルを越境した創作を続け、その多彩さ（多才さ）により「芸術のデパート」と称される。1963年、親友の訃報を聞きつけた直後に心臓発作を起こし、死去。享年74歳。

出会いシリーズ…

違う地域で活動するアーティスト同士の“出会い”。観客のみなさまと演劇の戯曲との“出会い”。様々な出会いのなかで立ちあがる舞台作品をなはーとでお楽しみいただくシリーズです。

シリーズ②は 2024 年 11 月下旬公演予定

原作 ： ジャン・コクトー
“LA VOIX HUMAINE” by Jean COCTEAU
翻訳 ： 渡辺守章（デュラス コクトー 渡辺守章：訳『アガタ／声』／光文社古典新訳文庫）
演出 ： 和田ながら（したため）
出演 ： 新垣七奈（演劇ユニット多々ら）
ドラマトゥルク ： 兼島拓也（チョコ泥棒・玉どろぼう）
美術 ： 丹治りえ

舞台監督：大塚聖一（那覇文化芸術劇場なはーと） 音響：甲田徹 照明：棚原栄作（（株）エムエルスタジオ） ドラマトゥルク監修：林立騎（那覇文化芸術劇場なはーと） 衣裳：かもめだかもめ
フランス語指導：ジリ・ヴァンソン 宣伝美術：アイデアにんべん 制作：島袋景子（シマシマ企画）、平岡あみ（那覇文化芸術劇場なはーと） プロデューサー：土屋わかこ（那覇文化芸術劇場なはーと）
ハラスメント防止研修：植松侑子
協力：したため、演劇ユニット多々ら、チョコ泥棒・玉どろぼう
著作権代理：（株）フランス著作権事務所、ジャン・コクトー委員会会長ユーグ・シャルボノ氏提供
主催：那覇市 企画制作：那覇文化芸術劇場なはーと、合同会社シマシマ企画

本作品をより深く知るために…

作品づくりに向けて読んだ本や見た映像

雑誌・書籍

和田ながら

ぼく自身あるいは困難な存在 ジャン・コクトー、秋山和夫（訳）
「声」の資本主義 電話・ラジオ・蓄音機の社会史 吉見俊哉
電話するアメリカ テレフォンネットワークの社会史 クロード・S・フィッシャー 吉見俊哉、松田美佐、片岡みい子（訳）
ライカムで待っとく 兼島拓也
アンドロイドは電気羊の夢を見るか？ フィリップ・K・ディック、浅倉久志（訳）
攻殻機動隊 士郎正宗
ムー
WIRED

新垣七奈

コクトー詩集
特別な友情フランス BL 小説セレクション
恐るべき子供たち 中条省平、中条志穂（訳）
身体なき声, 声なき身体, あるいは近代フランス文学における音声装置（フォノグラフ, 電話）の表象 阿部宏慈

兼島拓也

私のジャン・コクトー：想像を絶する詩人の肖像 ジャン マレー、岩崎力（訳）
生きることとしてのダイアローグ：バフチン対話思想のエッセンス 桑野隆
聞く技術 聞いてもらう技術 東畑開人
技法以前：べてるの家のつくりかた 向谷地生良
「聴く」ことの力：臨床哲学試論 鷲田清一
手の倫理 伊藤亜紗

丹治りえ

彫刻の歴史 先史時代から現代まで
アントニー・ゴームリー、マーティン・ゲイフォード、石崎 尚 、林 卓行（訳）
私のジャン・コクトー：想像を絶する詩人の肖像 ジャン・マレー、岩崎力（訳）
ぼく自身あるいは困難な存在 ジャン・コクトー、秋山和夫（訳）

映画・映像

和田ながら

「ヒューマン・ボイス」 ペドロ・アルモドバル
Youtube 上にあるフランシス・プーランク「人間の声」の上演映像いろいろ
Youtube 上にあるグリーンバック合成のメイキング映像いろいろ
「トゥルーマン・ショー」 ピーター・ウィアー
ライブ配信アプリ、「ピノ恋」プレイ実況、TikTok

新垣七奈

映像・オペラ５本
「オルフェ」 ジャン・コクトー

兼島拓也

「ヒューマン・ボイス」 ペドロ・アルモドバル
「フォーン・ブース」 ジョエル・シュマッカー

丹治りえ

「2001 年宇宙の旅」 スタンリー・キューブリック
「ヒューマン・ボイス」 ペドロ・アルモドバル
「トゥルーマン・ショー」 ピーター・ウィアー
「インターステラー」 クリストファー・ノーラン
「メメント」 クリストファー・ノーラン
「TENET テネット」 クリストファー・ノーラン
「マトリックス」 ラナ・ウォシャウスキー、リリー・ウォシャウスキー
「マトリックスリローデッド」 ラナ・ウォシャウスキー、リリー・ウォシャウスキー
「マトリックスレボリューションズ」 ラナ・ウォシャウスキー、リリー・ウォシャウスキー

アフタートーク

21 日 登壇者：和田ながら、丹治りえ 進行：兼島拓也
22 日 登壇者：和田ながら、新垣七奈 進行：兼島拓也

稽古場日記

那覇文化芸術劇場なはーと 自主事業
「出会い」シリーズ ❶ 和田ながら × 新垣七奈

ジャン・コクトー『声』

10.21 土 19:00 開演
2023 **.22** 日 14:00 開演

那覇文化芸術劇場なはーと
NAHA CULTURAL ARTS THEATER NAHArt

ごあいさつ

本日は出会いシリーズ①和田ながら × 新垣七奈 ジャン・コクトー『声』にご来場いただき、誠にありがとうございます。

那覇文化芸術劇場なはーとでは、「出会いシリーズ」と題し、新たな形で舞台作品を創造していくシリーズを立ちあげました。今回は京都を拠点に活動し、いま注目の演出家・和田ながらと、「演劇ユニット多々ら」として沖縄県内で精力的に活動する新垣七奈が出会い、1930 年に初演されたジャン・コクトーの戯曲『声』を、沖縄で創作しました。さらに、舞台美術には現代演劇に初挑戦となる彫刻家・丹治りえと、ドラマトゥルクに劇作家・兼島拓也を迎えました。

女性の一人芝居でありながら、作者は男性であり、国や時代も違うこの作品に、私たちはどれだけ共感できるだろうか…
本作品を２人の女性の手に託し、沖縄のアートシーンを牽引する強い仲間も引き入れました。約１ヵ月の稽古期間、事前のオンラインでのミーティングを加えると半年ほどをかけて、皆でジャン・コクトーという作家と戯曲に向き合いました。
違う地域で活動するアーティスト同士の沖縄での“出会い”、観客のみなさまと戯曲（物語）との “出会い” による本日の上演が、みなさまの素晴らしい観劇体験となれば幸いです。

最後に、本公演の実現のためにご尽力いただきました全ての関係者のみなさまに、厚く御礼申し上げます。

那覇文化芸術劇場なはーと

『声』を最初に読んだ時に抱いた印象は

え、こんな女の人いるの？と、半分くらいまで読んで怖くなり一回途中で台本を閉じました。その後、ぽつりぽつりと少しずつ読み進めてやっと8月頃に読み終えることができました。しかし、稽古が始まり七奈さんが台本を声にだして読み上げ、みんなで細部を分析、解読していくと、新たな女性の情景が浮かびだし、さらに電話の先の「あなた」の様子まで繋がり、最初とは全く違った印象を持つことができて、ジャン・コクトーさん『声』って面白い！演劇って面白いです！となっております。

稽古場ではどのように過ごしていますか

舞台美術の制作を始めなければいけなかったのですが、稽古に参加することで体感できるイメージがありそれをかたちにできると思っていたので、できるだけ稽古に参加することを心掛けました。打ち合わせだけでは掴みきれなかったものが稽古期間中に明瞭になったり、整理がついたりしました。後々の制作は時間に追われ大変ですが、メンバーとの雑談を通しながら（すべて重要な雑談）共有できる時間は制作にとってとても大切だと思いながら過ごしています。

ジャン・コクトーに一言

今の日本の一般的な部屋の中は均一的な工業製品や簡易的なもので溢れています。コクトーさんの想像に及ばないものや使い方がわからないもの、新しい技術もたくさんあります。コクトーさんが生きた１９３０年のフランス、パリの女の部屋とは程遠いかもしれません。約１００年前の部屋と、約１００年先の部屋を空想しながら、人の想像力を信じ、ここ現代に作ってみます。コクトーさんも楽しんでくれてるといいです。

今回の作品での自分の役割をどう捉えていますか

未だわからず戸惑っています。なんだか言われた通りに役を演じることでは足りないのでは？と勘繰ってしまい、そのせいで身動きが取れず戸惑っています（私が勝手に自滅しています）。身動きが取れないなりに気をつけていることは、なるべく嘘をつかないことです。多才な方々に囲まれている中で、何か言わなければ、何かしなければと焦ってその場しのぎの言葉や行動（嘘）をしてしまいそうになります。そんな時は、皆さんの言葉やアイディアを頭の中で反復させながら、焦らず素直にその場にいることを心がけています。

『声』を最初に読んだ時に抱いた印象は

大袈裟なわりに単調な話だなって感じでした。テキストから想像する女性は悲痛な表情を浮かべ、泣き、叫んでいて。これを演るのかと稽古前から億劫でした。3月に初めての読み合わせをした際、曖昧なイメージの中でなんとなく発声を行い、なんとなく「こんなもの」だろうと決めつけ、戯曲を読み上げる私の声は今聞き返しても鳥肌が立ちます。気持ち悪いです。

ジャン・コクトーに一言

同じ時代に生きてみたかった。（来世に期待！）あなたのことを「とても人間が好きな人」だったのかなと勝手に推測しています。誰かと共に生きることを諦めなかったわがままな人だとも推測しています。私は天才ではないので、人の才を見抜くあなたの良き話し相手にはなれないかもしれないけど、暇つぶし程度に1時間お茶をする相手にはなれるかもしれません。珈琲が美味しい喫茶店に行きましょう。私は珈琲飲めないけど。

観客の皆さんへのメッセージ

ずっと戸惑っています。たぶん今も。でも戸惑っている私はめっちゃ可愛い。『声』で私はひとりでは絶対に辿り着けなかった想像に辿り着いたのではと思っています。それは信頼し尊敬するメンバーとの想像の旅の先にあったものです。今度はみなさんと一緒に想像の旅へ。私たちの声が届きますように。

今回の作品での自分の役割をどう捉えていますか

これまで多くの演出家が手掛けてきた『声』の上演に、オルタナティブな可能性を示すこと。そのことによって、『声』が上演されるたびに残念な死を繰り返してきた主人公の女性を悲劇のループから救出すること。自分がおもしろいと感じることを惜しまず言語化し、一緒に仕事をするひとたちのクリエイティビティを刺激すること。演劇や演技という行為を、常に原理から考え、きちんと遊ぶこと。

稽古場ではどのように過ごしていますか

今回の現場はとても安心できるというか、信頼できる場所だなと思っています。各々の思ったこと感じたことを言葉にするための時間が与えられて、それがちゃんと聞き取られる。なので、誰かの話をちゃんと聞く。思ったことを言う。そういう、とてもナチュラルな（でも実践することは意外に難しい）時間を過ごしています。

『声』を最初に読んだ時に抱いた印象は

主人公の女性にまったく共感ができませんでした。感情的で、男性にとって都合がよく、悲恋にからめとられていく女性、というサブイボの出そうな鋳型。「ですわ」「よ」というリアリティのない語尾の頻発。この共感の不可能性をどのように創造的に乗り越えられるかが課題だ、と思っていました。最初の読み合わせの時には、これを「バ美肉（バーチャル美少女受肉）おじさん」が演じるのであれば納得できるかも、というようなことを話していました。

ジャン・コクトーに一言

混線と盗聴を司る交換手はいなくなりましたが、代わりにアプリやアルゴリズムがわたしたちの通話をコントロールしています。有線の受話器を持つことは少なくなり、人々は電話を肌身離さず持ち歩き、街中で無線のイヤホンをつけて傍目には独白にしか見えないような仕方で通話しています。あなたの知っていたものからずいぶん変わってしまったかもしれませんが、それでもわたしたちはまだ電話を使っていて、やっぱりどこか滑稽です。

観客の皆さんへのメッセージ

ご来場いただきありがとうございます。京都からやってきて、この街に一ヶ月滞在しながらつくった作品です。アトリエ銘苅ベースで『擬娩』という作品を上演するために２０１９年に那覇に来ているのですが、その時はまだこの劇場は工事中だったと記憶しています。再訪が叶い、そしてこの劇場で創作し、上演できる機会をいただけたこと、とても嬉しく思っています。楽しんでいただけましたら幸いです。

今回の作品での自分の役割をどう捉えていますか

稽古場ではなんというか、犬みたいなポジションでいれたらと思っています。この作品にも犬が出てくるのですが、人間ではない、でも家族の成員として居場所は確保されている、そういう存在。空気を読んで大人しくしたり、わざとかき乱したり、餌をねだったり。そうやって現場の流れから比較的自由な立場であれたらなと思っています。もちろん僕は犬みたく可愛くはないですが、可愛くない犬もいるので（失礼）、許してください。

電話に関するエピソードがあれば

小学生（低学年）の頃、友人宅に電話をかけると、電話を取った相手からピーという音の後に何かを話せと迫られました。咄嗟に、友人と喋っているテイで会話をはじめました。友人の発話（架空）を想定し、ちゃんと「うん」とか「へぇ」とか相槌を打ったり、「そういえばさ～」とかって話題を変えたりなんかして。あれって、ただ要件を伝えればよかったんですね。留守電のシステムって難しい。

ジャン・コクトーに一言

稽古を重ねるなかで何度も何度もこの『声』という作品を読み返していますが、読むたびに発見があり、想像力が喚起され、新たな仮説が生成されます。正直、初読のとき、このシンプルな筋立てのなかにこれだけ豊かで多様な読み方ができるポテンシャルが潜んでいるとは思いませんでした。なので、一言あるとすれば、ごめん、コクトー。

で、もう一言。これ、おもしろいよ！

出
演／新垣七奈（あらかき・なな）

演出家、俳優。沖縄県浦添市出身。高校で演劇部に入り、演劇を始める。2016年に演劇ユニット多々らを結成、翌年17年に第一回公演『girl』を上演。
近年の主な出演作には、20年コロナ禍でオンラインの開催が話題となった九州・沖縄版『未開の議場』オンライン（作：北川大輔）や、21年神里雄大が演出した『琉球怪談』（原作：小原猛、演出：神里雄大）に出演している。

美
術／丹治りえ（たんじ・りえ）

美術家、彫刻家。1983年福島県生まれ、沖縄県在住。沖縄県立芸術大学大学院彫刻専修修了。建造物の中の日常空間をモチーフに建築資材や日用品など身近にある多様な素材を用い、記憶と日常の脆弱さを可視化するインスタレーション作品を発表している。主な展示に個展「みおぼえのある風景」（2023年、RENEMIA ／ Luftshop）、個展「仮設｜部分」（2022年、gallery rougheryet）、「REDRAW TRAGEDY」（2021年、クンストフォーラム ボン）

撮影：守屋友樹

演
出／和田ながら（わだ・ながら）

演出家。1987年生まれ。京都造形芸術大学芸術学部映像・舞台芸術学科卒業、同大学大学院修士課程修了。2011年２月に自身のユニット「したため」を立ち上げ、京都を拠点に活動。主な作品に、作家・多和田葉子の小説を舞台化した『文字移植』や『祖母の退化論』、妊娠・出産を未経験者たちが演じる『擬娩』などがある。美術、写真、音楽、建築など異なる領域のアーティストとも共同作業を行う。NPO法人京都舞台芸術協会理事長。

ド
ラマトゥルク／兼島拓也（かねしま・たくや）

劇作家。1989年、沖縄市出身。演劇グループ「チョコ泥棒」および「玉どろぼう」主宰。主に沖縄県内で演劇活動を行い、沖縄の若者言葉を用いたコメディやミステリなどのオリジナル作品を創作している。2022年、『ライカムで待っとく』（KAAT 神奈川芸術劇場プロデュース）で、第30回読売演劇大賞優秀作品賞を受賞。同作で第26回鶴屋南北戯曲賞および第67回岸田國士戯曲賞の最終候補となる。今回、初めてドラマトゥルクとして参加する。